

# 旧湯島聖堂大成殿内の孔子像に関する一考察

伊藤 たまき

はじめに

一、旧湯島聖堂大成殿内の孔子像について

(一) 制作者及び寄進者

(二) 像容及び材質・法量

(三) 大成殿の概要及び神座と諸像の配置

二、旧湯島聖堂大成殿内の孔子像の特徴

(一) 司寇像と袞冕像

(二) 胡座像

おわりに

はじめに

約二〇〇年の長期にわたった戦乱の世を治め、江戸幕府を開いた徳川家は、その新体制の基盤として、上下の礼を重んじる儒学を採用した。これを受けて、幕府直轄の学問所である昌平黉や、各藩の学問所では、孔子をまつる廟が創建

され、そこでは積奠・積粟の祭儀が執り行われた。

日本の孔子廟や積奠については、大宝元年(七〇二)の積奠にまでさかのぼることができる(1)。しかし応仁の乱以降、国家や時の権力者による祭儀は途絶えていた。先行研究が指摘しているように、孔子廟が各地に創建され、積奠が重要行事として復活し、新体制の思想的基盤として多大な影響をもたらすようになるのは、江戸時代であった(2)。

江戸時代の孔子廟や積奠については、主に歴史学や思想史学において研究がなされてきているが、一方でその内部に祀られていた絵画・彫刻、また積奠で使用された祭器など、絵画・彫刻・工芸についての美術史学による研究は、いまだ十分に行われてはいない(3)。しかし、こうした江戸期の儒教美術を考察することは、江戸時代の政治や思想、文化を考察する上で極めて重要であると思われる。

特に、江戸文化の草創期に創建された湯島聖堂の内部には、狩野山雪や狩野益信ら、当時の御用絵師によって制作された《歴聖大儒像》や賢儒画像扁額、また孔子および四配(顔子・曾子・孟子・子思)の木彫彫像などが祀られていた。それらは、江戸時代の最初期に制作されたものであるばかりでなく、わが

国の絵師・彫刻師（仏師）によって制作された儒教絵画・彫刻として注目される。

湯島聖堂は、五代将軍徳川綱吉によって、元禄四年（一六九二）、現在の地に創建された。その前身は、上野忍岡にあった林家私邸内の孔子廟である。この廟は、寛永九年（一六三二）、尾張藩主徳川義直の莫大な援助により建てられたもので、このとき、祭器や義直直筆の「先聖殿」の扁額とともに、孔子及び四配の像が寄進された。これが元禄三年に湯島の地に移され、以降大成殿内に安置され崇敬の対象となったものである。

忍岡の聖堂が建てられ、それが湯島聖堂へと移行する寛永年間から元禄年間には、儒学が体制の基盤として定着し、儒教の重要な祭儀である積奠が国家行事として確立していく時期にあたる。しかし、古代より宮中行事として行われていた積奠は、応仁の乱以降、足利学校など一部の機関を除いて途絶えていた。従って儀式の方法、また祭儀で使用される儒者の画像や祭器にいたるまで、総てを本場である中国から学びなおす必要があった。一方で、この間中国本土においては、祀られる儒者の扱いや儀式の方法に幾多の変遷があった。すなわち参考となるテキストが複数存在していたのであり、積奠の中心となる孔子像の制作に際し、それらがどのように関わっていたかを明らかにすることは、江戸期の儒教思想を考察する上で大きな意味を持つと思われる。

ところが、旧湯島聖堂の孔子像及び四配像は、大正一二年（一九二三）の関東大震災によって聖堂もろとも焼失してしまう。おそらくはそのために、本像に関する論考は、これまでほとんどなされてこなかった。しかし、旧湯島聖堂内の孔子及び四配の像については、種々の資料が残されており、その像容を推察することは不可能ではない。また、近年の研究によって、像の制作者についても明らかとなってきた。そこで本稿では、失われた旧湯島聖堂内の孔子像に

ついて、これらの資料や先行研究をもとに、制作者や像容等を推察し、さらにそこから本像の位置づけを試みたいと思う。

#### 一、旧湯島聖堂大成殿内の孔子像について

旧湯島聖堂大成殿内に安置されていた孔子像及び四配像は、度重なる聖堂の火災にもかかわらず、その都度、当時の火消役人の手によって堂外に運び出されており、焼失を免れていた（略年譜参照）。

明治維新後、明治四年（一八七一）に大学が廃され、文部省が置かれることにより、昌平黉はその歴史を閉じた。大成殿は、孔子の崇敬の場、積奠のための空間という機能を失い、同年九月に文部省博物館が設置されると、大成殿は陳列場となり、博物館と称された。

この間、孔子及び四配の像は大成殿より撤去され、諸額や祭器とともに一時内務省博物館に収容されていた。明治九年に再び大成殿に安置されたが、以降、ほとんど注目されることはなく、長らく放置の状態にあったようである。

この状況が一変するのが、明治末期である。明治三九年（一九〇六）、東京高等師範学校の関係者らによって、孔子祭典会が興り、翌年孔子祭典会第一回祭典が大成殿において開催された（4）。

このような動きを受けて、聖堂や、大成殿内に祀られていた孔子像に対する関心も高まった。孔子像の模像が制作され、また孔子像に関する講演なども行われた（5）。大正一一年には、湯島聖堂が史蹟の指定を受けるにいたった。しかしその翌年の大正一二年、関東大震災により、宝永元年（一七〇四）再建時の入徳門及び水屋を残し、湯島聖堂は全焼し、孔子・四配像もこのとき失われてしまう。

従って現在、孔子像をがどのようなものであったかについては、関東大震災前に作られた諸資料によって推測するしかない。孔子像に関する資料は、比較的多く残っており、制作者や像容を窺い知る上で重要なものも少なくない。具体的には、

・文献資料『昌平志』等。

・明治期に制作された孔子像の模像。

・明治期の古写真・錦絵（明治三年ごろ、下岡蓮杖によって撮影され、現在東京国立博物館に所蔵されている「旧湯島聖堂大成殿内木像」と題された三葉の写真など）。

があげられる。本章ではまず、これらの資料から、旧湯島聖堂大成殿内の孔子像について、その制作者・寄贈者、像容、配置について考察していきたい。

#### (一) 制作者及び寄進者

旧湯島聖堂の孔子像及び四配像の制作者に関しては、『昌平志』には一切記述がなく、長らく不明のままとされてきた(6)。ところが近年、山本泰一氏、三山進氏によって、湯島聖堂や昌平齋以外の資料から、本像に関する記録が発見・紹介され、これにより制作者や制作時期などが明らかとなってきた(7)。

山本氏は、『源敬様御世御記録』『敬公実録』『事蹟録』など、尾張徳川家で編纂された文書の中に、上野忍岡の先聖殿に関して詳細な記録が残されていることを指摘している。そこには聖像に関する記述もあり、仏師左兵衛なるものに、像の代価を支払った旨が記されているという(8)。

さらに三山氏によって、第二二代康猶から第二六代康祐までの京都七条仏所の記録が紹介され、そこに旧湯島聖堂大成殿内の諸像のものと思われる記述があることが分かった(9)。それによると、これらの像は、寛永九年(一六三二)、

尾張初代藩主徳川義直の発注により、七条仏所第三代康音によって制作されたと記されているという(10)。

ここで、『昌平志』『羅山林先生行状』などの記述をたどっていくと、そもそも湯島聖堂は、寛永七年、儒臣林羅山が、三代將軍徳川家光より、上野忍岡に五三三坪の土地と金二〇〇両を拝領し、私塾及び書庫を建てたことにはじまる。さらに翌々年の寛永九年、今度は尾張藩主徳川義直が資金を提供し、同敷地内に先聖殿が建立された。これが湯島聖堂の前身とされる。このとき、内部に安置する孔子像及び四配像、若干の祭器、義直自身の直筆による「先聖殿」の扁額なども寄進された(11)。七条仏所の記録にも、発注者として尾張藩主義直の記述が見られ、さらにその年号も『昌平志』や尾張藩の諸文書と一致することから、山本氏も指摘しているように、この記録が忍岡の先聖殿内の諸像について書かれたものである可能性は極めて高いと思われる(12)。

忍岡の先聖殿は、建立から半世紀後の元禄三年(一六九〇)、五代將軍徳川綱吉の命により、湯島の地へ移転され、先聖殿は大成殿と改称され、新たに仰高門を設置するなど、規模も拡大した。『昌平志』には、綱吉が移転・改築を命じた理由として、先聖殿の創設に尾張家が深く関係しており、幕府の造営ではないこと、忍岡の孔子廟が寛永寺の敷地に近接していることがあげられている(13)。翌年、徳川幕府による湯島聖堂が落成し、綱吉も列席しての積奠が行われたのであるが、中に安置する聖像については、忍岡の先聖殿の諸像が祀られることとなったようである。これに先立ち、同年二月、忍岡から湯島聖堂大成殿へ、孔子及び四配像の遷座が行われ、以降これらの諸像は、湯島聖堂の大成殿において崇敬を集めるのである(14)。

すなわち、旧湯島聖堂の孔子像は、尾張藩主徳川義直が、林羅山のために、七条仏師康音に依頼して作らせたものであることが、これらの資料からうかが

われる。

## (二) 像容及び材質・法量

失われた旧湯島聖堂の孔子像の像容・材質・法量を知るうえで、まず手がかりになると思われるのは文献資料である。

先にあげた七条伝所の記録から、本像が木像で、さらに玉眼が施されていたことがうかがわれる。またここには、法量についても記されており、それによると像高は二尺一寸、すなわち約六四センチであったらしいことが分かる(15)。

『昌平志 巻第一 廟図誌』にも、孔子像について「大成至聖文宣王 像設粧繪 袞冕九章」と記した箇所がある(16)。「袞」とは帝王、あるいは三公(公・侯・伯)の礼服、「冕」は帝王、諸侯、卿大夫の礼服用の冠を意味する。「九章」とは天子・上大夫の礼服の文様のことで、本来は、天子がそなえるべき美德を二の文様としてシンボル化したものである(17)。

孔子が前四七九年に没してのち、漢代に五経博士が置かれるなど、儒教が国の教育制度の基盤として確立するにつれ、孔子に対する崇敬は高まっていた。唐代玄宗皇帝の時に至り、「文宣王」、すなわち王(天子)の称号が贈られた。

これに伴い、孔子は天子の装い(袞冕)で表されるようになる。天子としての孔子の表現は、日本にも伝来し、佐賀県の多久聖廟の孔子像など、一二章の礼服をまとひ冕冠を戴く孔子の画像・彫像も残されている。

『昌平志』の記述に従えば、湯島聖堂の孔子像は、九章の袞服姿であったらしい。これは一二章のうち、日・月・星辰を除いたものである。さらに「像設粧繪」とあることから、像には彩色が施されており、おそらくは九章の文様も、像に直接描きこまれていたのではないかと考えられる。なお、七条伝所の記録

にも「御木像奉為彫刻、極粉色玉眼入」とあり、彩色がされていたことが記されている。

また像容に関しては、坐像か立像かという問題がある。このことに関しては、明治期に作られた模像が重要な参考になると思われる。

孔子像の模像に関しては、明治末期、孔子祭典会が開始された前後から、いくつか制作されたようである(18)。足利学校に所蔵されている、新海竹太郎制作の模像を見ると、旧湯島聖堂の孔子像は坐像で、両足を組み、両膝が横に張り出した、あぐら(胡座)のような坐形であったらしいことがうかがわれる(挿図1)。

胡座像であったことについては、文献からも指摘することができる。例えば塚本靖氏は、大正九年(一九二〇)、「孔子の像に就て」と題した講演の中で、「湯島の聖堂及下野の足利学校孔子像は共に李龍眠或は呉道子作と称する凭几の坐像が元となつてゐるらしい」と述べている(19)。この記述から、湯島聖堂の孔子像と足利学校の孔子像とがよく似た坐像であったことが推測される。足利学校の孔子像(挿図2)は、天文四年(一五三五)制作と考えられ、湯島聖堂の孔子像より一〇〇年ほどさかのぼる。かつ失われることなく今に伝来している貴重な遺例の一つであるが、これを見るとやはり両膝が横に張り出した像容をしている。

さらに模像からは、旧湯島聖堂の孔子像が司寇冠をかぶっていたことも分かる。司寇冠とは、法官のかぶる冠のことで、孔子が魯国の司寇(司法大臣)であった時の姿を表している。

ところで、東京国立博物館には、「旧湯島聖堂大成殿内木像」と題した数枚の古写真が所蔵されている(20)。明治三年頃、下岡蓮杖が撮影したもので、裏には「横濱蓮杖会」の印がある。おそらくは大成殿内にあつた五体(孔子像・

四配像)すべてを撮ったと思われるが、現在では四配像のものと思われる三葉が残っている(21)。この三体は表情・服装・手の様などに若干の相違が見受けられるものの、すべて坐像(胡座形)で、ポーズが非常に似通っている。また、旧聖堂の内部を撮影した絵葉書(挿図3)からも、五体の聖像がほぼ同じポーズであったことが確認できる。従って旧湯島聖堂の孔子像は坐像(胡座形)であった可能性が高い。

以上、各資料から推測される旧湯島聖堂の孔子像の像容・材質等をまとめると以下のようである。

・木像

・彩色 玉眼

・像高 約六四センチ 坐像(胡座形)

・冠(司寇冠)をかぶり、九章の文様が施される。

### (三) 大成殿の概要及び神座と諸像の配置

さて、孔子像・四配像は、聖堂内でのように安置されていたのであろうか。

このことについて『昌平志』を参考に整理していきたい。

『昌平志 卷第一 廟図誌』には、諸像の位置についての記述とともに、その配置図も挿入されている(挿図4)。旧湯島聖堂大成殿は、南に面して建てられ、幅五間五尺(約一〇・五メートル) 奥行三丈七尺五寸(約一一メートル)、高さ四丈三尺三寸(約一三メートル)のほぼ正方形の建物で、さらにその左右に幅三間(約五・五メートル) 奥行一丈九尺五寸(約六メートル)の張り出しがついており、上から見ると凸の字を逆にしたような構造をしていたようである。大成殿北壁の中央、すなわち大成殿奥には、神座と呼ばれる小室が設けられていた。この室は高さ五尺八寸(約一・八メートル) 奥行六尺五寸(約一・九メ

ートル)で、手前には七段の階段と手すりがあった(挿図5)(22)。そしてこの神座に諸聖像が安置されていた。

孔子像及び四配像はそれぞれ櫃に納められ、南向きに置かれていた。なお大成殿は南に出入口が開かれていたので、像は出入口を向いており、すなわち参拝者と向かい合う形で配置されていたことになる。中央に孔子、孔子像の向かって右側に顔子・思子、左側に曾子・孟子像が配された。この五聖像の前に、十哲の木主(位牌)が、それぞれ五位づつ一つの櫃に納められ、こちらは向かい合うように配置された(23)。

以上が神座内の配置である。この他、大成殿内部には、狩野山雪筆の《歴聖大儒像》六幅(周子・程叔子・邵子・程伯子・張子・朱子)及び八九人の儒者を描いた賢儒圖像扁額が飾られていた。《歴聖大儒像》は、神座の外側に、三位づつ掲げられていた。『昌平志』にも南向きに掲げられたとあることから、北壁に掛けられたものと思われる(24)。なお、この《歴聖大儒像》は、釈奠など祭祀の時以外は外されていた。

賢儒圖像扁額の詳細については、中根恭子氏の論文を参照されたい。この扁額は元禄元年(一六八八)、狩野益信によって制作されたもので、もともと忍岡の孔子廟に掲げられていた。一枚の扁額に五十六、七十八人の儒者が描きこまれており、東西廡内に八枚ずつ掲げられていた(25)。なお、この扁額は、元禄一六年(一七〇三)に、大成殿もろとも焼失し、宝永元年(一七〇四)、聖堂の再建に伴い新たに制作された。その時の画員は狩野常信である。この扁額は寛政年間まで大成殿内に掲げられていたが、寛政一一年に祭儀の法が改変されるにあたり、十哲の木主とともに撤廃された(26)。

## 二、旧湯島聖堂大成殿内の孔子像の特徴

全国に現存する孔子の画像・彫像について調査・研究をされている翠川文子氏によれば、わが国における釈奠は、文献上古くは奈良時代、大宝元年にまでさかのぼることができる。だがこのとき、祭器はある程度整えられていたと考えられるが、孔子像については記録がなく、由来・使用期間など明らかでないという。孔子像の存在が確認できるのは、天平七年（七三五）、遣唐使の吉備真備が帰朝した後のことで、この時吉備真備は唐から多くの文物とともに孔子の画像を将来した。以降、大学寮での釈奠の際などに用いられた孔子像は、この唐代の画像がそのまま、模写を繰り返しながら使用されていたようである（27）。従って日本における初期の釈奠で使用されていた孔子像は、そのほとんどが、近世に見られるような彫像ではなく、画像であったことがうかがわれる。

一方中国においては、画像・彫像（塑像）ともに祀られていたようであるが、明代（一五三〇年）に像をとりやめ、木主（位牌）を用いることが定められた。ところが、翠川氏も指摘されているように、日本では、江戸時代に釈奠が復活すると、木主を祀ることはほとんど普及せず、画像ないし彫像が置かれるようになるのである（28）。

第一章では、残された諸文献や近年の新出資料をもとに、失われた旧湯島聖堂大成殿内の孔子像の像容・制作者などについて考察した。その結果、本像が仏師の制作であること、また坐像（胡座）像で、さらに九章の礼服と司寇冠をつけた姿で表されていたことなどが示唆された。

では、そうした像容を持っていたと考えられる旧湯島聖堂の孔子像は、日本の儒教文化、特に孔子の彫像・画像の分野において、どのような意味を持つのだろうか。本章では、九章の礼服と司寇冠をつけていること、また胡座形であ

ることに着目し、各地に散在する他の孔子像との比較を行いつつ、本像の位置づけを試みたい。

### （一）司寇像と袞冕像

旧湯島聖堂の孔子像の大きな特徴の一つと思われるものに、司寇冠と九章の礼服という像容がある。先行研究でも指摘されてきたように、孔子像には冠・服装・持物などにより、いくつかのパターンが存在するが、それらは①袞冕像、②司寇像、③行教像の三つに大別される。このうち①は皇帝（天子）の姿で表されたものである。冕と呼ばれる冠をかぶり、袞服と呼ばれる礼服をまとい、さらに圭を持つ場合もある。なお、冕とは、上に延（板）がのり、延の前後に施（りゆう）という、玉をひもで連ねたものがついた礼装用の冠で、一二施は天子、諸侯は九施というように、身分により施の数が決まっていた。また袞服に関しても、一二章だけでなく、九章・七章・五章というように、いくつかのパターンが存在する。②は孔子が魯の司寇（司法官）であった頃の姿を表したもので、司寇冠という独特の冠をかぶっている。③は弟子に教えを授けている姿を表したもので、幘頭（黒布の頭巾）をかぶり衣服も簡素なものをつけている。このうち、孔子廟や釈奠で祀られる孔子像は、①・②の像が多い。

旧湯島聖堂の孔子像が特徴的であるのは、司寇冠をかぶると同時に、九章の礼服をまとう点である。章の数が相違はあるものの、こうした像容の孔子像は、日本においては比較的多く作例が残っている。だが一方で、中国においては、司寇冠をかぶり袞服をまとう孔子像はほとんど見られない。従って、この像容は日本特有のものではないかと推測される。

このことを考察する上で重要であると思われるのが、狩野山雪筆の《歴聖大儒像》である。伏羲・神農・黄帝・帝堯・帝舜・大禹・成湯・文王・武王・周

公・孔子・顔子・曾子・子思・孟子・周子・張子・程伯子・程叔子・邵子・朱子、合計二十一人の聖人・儒者がそれぞれ一幅に描かれたもので、画面上部には寛永十三年（一六三六）に来日した朝鮮通信使、金世謙による贊が書き込まれている。そして、この《歴聖大儒像》の孔子像（挿図6）もまた、一二章の礼服をまとっているが、冕冠ではなく、司寇冠をかぶっているのである。

杉原たく哉氏は、山雪が《歴聖大儒像》を描くにあたり、いくつかの粉本を使用しており、孔子像については『三才図会』がもとになっているのではないかと述べている（29）。『三才図会』の孔子像は、司寇冠をかぶっており、また容貌や持物も非常に似通っている（挿図7）。従って杉原氏が指摘しているように、山雪が孔子を描くにあたり、『三才図会』を参考にした可能性は高いと思われる。しかし、『三才図会』の孔子像には、衣服に一二章などの文様はまったく描かれていない。これが、『三才図会』において衣服の文様が省略されたためでないことは、同じ『三才図会』に掲載されている皇帝像に、一二章の文様が描かれている図様が存在することから明らかである（挿図8）。すなわち『三才図会』を元にしておりとするならば、山雪は意図して、描かれていない一二章の文様を描き加えたことになる。

ところで、『歴聖大儒像』も旧湯島聖堂の孔子像も、ともに湯島聖堂の前身である忍岡の先聖殿のために制作され、さらにどちらも寛永九年に制作されたものである。《歴聖大儒像》は、羅山の依頼によって制作されたと考えられる（30）。一方、旧湯島聖堂の孔子像は、先述したように、尾張藩主徳川義直が羅山に寄贈したものである。

徳川義直（一六〇一—一五〇）は、家康の第九子で、尾張徳川家の初代藩主をつとめるかたわら、儒学に深い造詣を示し、その興隆に尽力した。名古屋城内に建立した八角の孔子廟は、忍岡の先聖殿を先駆けるもので、江戸時代最初の

孔子廟とされている。

この廟は現在失われてしまったが、そこに安置されていたと考えられる孔子像が、現在徳川美術館に所蔵されている（挿図9）（31）。この孔子像は、立像で、司寇冠をかぶっていることから、司寇像と思われる。青銅製でその上に鍍金が施されている。また、徳川美術館には、同じ材質による像が他に四体伝来しており、山本氏によれば、もともとはこの四体（禹・舜・周公・神農）とともに一つの厨子に納められていたらしい。なお、現在は一体ずつ木箱に収められ、厨子も別に保管されている。

この孔子像には、背面と両側面に龍の文様が彫りこまれているが、いわゆる一二章の礼服姿ではない。だが、同時に制作されたと思われる禹王像には、背面に一二章の文様である粉米・黼・黻を見ることができ（挿図10）、孔子像には意図してこうした文様をつけなかったことがうかがわれる。

以上のことを考え合わせるに、旧湯島聖堂の孔子像は、基本的には司寇像をかたどっているが、そこに九章の文様を加えたのは、日本における創意であったと考えられる。さらに、『歴聖大儒像』と制作時期が同じであり、しかもともに羅山とゆかりの深い忍岡の先聖殿のために制作されたことを思い起こすと、司寇像に一二章（旧湯島聖堂の孔子像は九章）を描き加えるという指示は、羅山によるものではないかと推測される。寄進者は義直であり、また、旧湯島聖堂の孔子像について、羅山が関与したという記録は残っていないが、義直が制作に深く関与したと考えられる徳川美術館の孔子像が、司寇像で一二章の文様がないことを鑑みるに、旧湯島聖堂の孔子像の制作にあたっては、羅山が監修といった形で深く関わっている可能性を指摘できるのではないだろうか。

わが国に現存する孔子の彫像・画像を見ると、旧湯島聖堂の孔子像をはじめ、徳川美術館所蔵の金属製の孔子像、また足利学校の孔子像など、早い時期に制

作された孔子像は司寇像、もしくは行教像であり、袞冕像はほとんど見られない。現存する作例から、わが国において袞冕像が現れるのは、多久聖廟の孔子像や、閑谷学校の孔子像などが作られる元禄年間頃と考えられる。

翻つて中国において袞冕像が登場するのは、先述したように、孔子に王号が贈られた唐代以降（玄宗開元二十七年（七五〇））のことである。さらに、宋代・真宗のとき（一〇〇九年）、孔子像は九施の冕、九章の袞と定められた。ついで一一五〇年、徽宗のときには、一二施の冕、九章の袞となり、一一七四年には一二施の冕、一二章の袞と定められたという（32）。

つまり、江戸時代には、すでに様々な孔子像が存在していたことになる。しかし中国においては、冕袞はいわばセットで考えられており、しかも身分に応じて数が厳格に定められていた。司寇像に、一二章や九章の文様を施すというのは、中国の図様ではなく、こうした様々な孔子像のイメージが流入する中で、それらを組み合わせ作り上げた、日本特有の孔子像であると考えられるのである。

## （二）胡座像

江戸時代初期に制作された孔子像が、中国の粉本を手本としながらも、同時に独自の解釈を加えて制作されていたことは、旧湯島聖堂の孔子像が胡座形であったことからもうかがわれる。

孔子像は、画像・彫像を問わず、立像・坐像どちらも存在する。このうち坐像は倚像で表されることが圧倒的に多い。これは、中国における孔子の坐像が多く倚像であるからであろう。なお、塚本靖氏によると、中国の孔子画像には、他に正座の姿をとるものがあるという（33）。塚本氏は、その作例として『關里志』に掲載されている凭几像と呼ばれる画像などをあげている（挿図11）。し

かし孔子廟に祀られる孔子像は、中国・日本とも、ほとんどが立像もしくは倚像であり、正座の孔子像は日本においては普及しなかったようである。

旧湯島聖堂の孔子像は、第一章でも述べたように、胡座像であったと考えられる。新海竹太郎による模像（挿図1）を見ると、足を組み両膝が横に張り出していることが分かる。ところが、こうした坐形の孔子像は、中国においては類例が確認されず、日本においても現在確認できる作例は、

・足利学校の孔子像（挿図2）。

・丸亀正明館内の孔子像（挿図12）（34）。

・佐倉藩江戸藩邸に伝来し、現在佐倉高等学校に所蔵されている孔子像（挿図13）（35）。

・尾張藩倫明館に伝来し、現在徳川美術館に所蔵されている孔子像（挿図14）（36）。

・現在、湯島聖堂に所蔵されている孔子画像（挿図15）（37）。

など十に満たない。

このうち最も古いと考えられるのが、足利学校の孔子像である。この像は背面及び底面に墨書が残されており、そこから天文四年（一五三五）の制作とされている（38）。また像容から行教像と考えられる。

一方、足利学校以外の孔子像は、衣服の文様に相違が見受けられるものの、司寇像であること、手を前面で重ねていること、帯が長く垂れている様など、造形上いくつもの共通点が見られる。さらに、丸亀藩正明館のものは、台座に獅子が彫られているのだが、旧湯島聖堂の孔子像の台座にも獅子が彫りこまれていたらしいことが、河鍋暁斎の『今昔珍物集』中の湯島聖堂博覧会の図からうかがわれる（挿図16）。なお、旧湯島聖堂の孔子像を写したものでないかと考えられる湯島聖堂所蔵の画像にも、台座に五頭の獅子が描かれている。



以上の像容上の共通点、また丸亀藩や佐倉藩が、昌平黌の積奠を倣っていることなども考え合わせると、これら胡座形の孔子像は、旧湯島聖堂の孔子像がもととなって制作された可能性が考えられ、湯島聖堂所蔵の孔子画像など、こうした模写物によって胡座形の孔子像の図様が伝播したことも推測される。

それではなぜ、旧湯島聖堂の孔子像は、このような像容となったのであろうか。考えられるのは、胡座形が日本においてポピュラーな坐形であったということである。旧湯島聖堂の孔子像・四配像が、七条仏師の手になるものであることは第一章において述べた。この七条仏師は、仏像の他に、徳川家を中心とした、肖像彫刻も残している(39)。興味深く思われるのは、これらわが国における仏像や肖像彫刻が、やはり足を組み、両膝が横に張り出す坐形をしている点である。

本像の制作にあたり、まず手本となったのは、中国からもたらされた文献であり、それは画像であったと思われる。具体的にどの文献が参考になったかは明らかでないが、立像・倚像とともに、先述した凭几像も流入していた可能性は高い。単純に考えるならば、おそらくは像容について指示をしたと思われる羅山が、あるいはこの凭几像も参考として示し、それを受けた仏師が、その像を正座ではなく、馴染み深い胡座形と解釈したという推測も成り立つ。

だが、もっと重要であると思われるのは、近世の日本における儒教と仏教の関わりである。特に江戸時代前半に儒学の主流となる朱子学は、禅の影響を受けて発展したものであり、日本でも主に禅僧たちによって研究されてきた。後に仏教を排斥するものの、林羅山は禅僧として学問の道に入り、後には法印の号も得ている。また足利学校の孔子像も、仏教僧の勧進によって制作されたものであることが指摘されている(40)。

これらの事実は、日本に儒教が本格的に摂取されはじめた時期、仏教がその

基盤にあったことを示唆しているように思われる。先述したように、日本では、積奠が長らく中断していた時期がある。一方で仏教は、常に政治・文化に多大な影響を与え、時に他宗教とも交じり合いながら、深く浸透していた。旧湯島聖堂の孔子像が造られた江戸時代初期は、儒教が社会・政治の中に本格的に摂取される前段階にあたる。いわば聖堂の本尊である孔子像の制作にあたって、像造に深く関与したと考えられる羅山が、仏像あるいは禅宗の祖師である達磨像など、仏教の尊像も参考にした可能性は極めて高いと思われる。近世の儒教美術と仏教との関連性については、現段階では十分に論じられず今後の課題としたいが、七条仏師の仏師の手によるものである点からも、本像が中国にはない胡座という像容になったのは、わが国の伝統的な仏像のイメージが踏襲された結果であると指摘できるのではないだろうか。

#### おわりに

以上、旧湯島聖堂の孔子像について、江戸時代から近代にわたる文献・絵画史料をもとに、その像容について考察を試みた。その結果、焼失した孔子像が九章の礼服姿で、司寇冠をかぶり、また胡座像であったことが明らかとなった。さらに、旧湯島聖堂の孔子像が、司寇像・袞冕像という、中国の孔子像をもとにしつつも、司寇像に九章の礼服を施し、また胡座という中国には見られない姿形をとっていることから、これが日本独自の孔子像である可能性を指摘した。

旧湯島聖堂の孔子像が制作された時期は、林羅山をはじめ、長らく途絶えていた積奠などの仕儀を積極的に摂取した時代にあたる。しかし本場である中国でも、時代あるいは儒学者の解釈により、祀りかたには様々な変遷があった。

従って江戸時代初期は、様々な孔子のイメージが存在し、それらが一挙に流入したと考えられる。そのため、受け手側によって、祭儀の方法や像容について選別が行われ、結果として、中国にはない、独自の解釈が加えられた孔子像が作られたのではないだろうか。本像は、江戸時代における儒教文化の黎明期に、日本において制作された孔子像と捉えることができ、美術史的にも重要な作例といえるだろう。

ところで本稿では、なぜ中国の図像をそのまま取り入れず、そうした選別や独自の解釈を行ったのかということについて、その思想的な背景までは十分に明らかにすることができなかった。さらに旧湯島聖堂の孔子像に関する問題点として、忍岡の先聖殿から湯島聖堂への遷座があげられる。これまで述べてきたように、旧湯島聖堂の孔子像及び四配像は、もともと忍岡聖堂のために制作されたものであり、元禄三年の湯島聖堂建立の折、大成殿に移され安置された。

忍岡聖堂は林羅山の私塾の中にあつたものであり、どちらかというところ私的な礼拝空間である。だからこそ、中国のテキストに縛られない、独自の解釈による孔子像が生み出され、安置されるにいたつたともいえる。翻つて湯島聖堂は、五代將軍徳川綱吉の命によって建立されたものであり、忍岡聖堂と比べ、はるかに公的な礼拝空間である。さらに湯島聖堂の孔子廟が「大成殿」と称され、孔子像も「大成至聖文宣王」となっていることから、孔子像は本来天子の姿をとる袞冕像がふさわしく、司寇・九章の礼服はそぐわないように思われる。湯島聖堂の創建にあたり、儀式において最も重要なものであるはずの孔子像が新調されず、忍岡聖堂のものを遷座したという事実は、これまでほとんど論じられてこなかったが、興味深い問題である。

先に指摘したように、本像は胡座形をとる。これはわが国において仏像や武家の肖像などでよく見られる像容である。さらに、仏教はわが国の社会、政治、

文化に深く浸透していた宗教であり、また武將の肖像は、徳川家康の肖像のように、時として礼拝の対象ともなった。すなわち、仏像や武將の肖像のイメージは、単に馴染みものであるだけでなく、崇敬の対象という重要な要素を持っていた。従つて儒教を武家社会の中に本格的に導入しようとした湯島聖堂創建時、それがスムーズに行われることを目し、礼拝の対象となる孔子像には、むしろこれらのイメージが必要とされたといえるのではないだろうか。そのように考えるならば、忍岡聖堂の孔子像は、その意に適つた、極めて理想的な像であつた。加えて、本像は、江戸文化の草創期に、儒教をその基軸として根付かせた羅山が崇敬し儀式に用いた、由緒あるものであり、また綱吉が学問に深く傾倒した將軍であり、林家での積奠にも度々参列していることをも思い起こすと、この像が湯島聖堂に引き継がれたことは、意図して行われた可能性が高いと思われるのだが、以上のことは現段階では推測の域を出ない。

これらの問題点は今後の課題として後稿に譲りたいが、ともに、当時の儒教思想が少なからぬ影響を及ぼしていることが強く示唆され、さらには礼拝空間によつて暗示した支配と服従という政治的な意図も看取される。旧湯島聖堂の孔子像は、単に美術史のみならず、歴史学や思想史学にも及ぶ論点をはらんでいるのであり、江戸初期の文化や思想を考察する上でも、極めて重要な意味を持っているといえよう。

## 注

- (1) 翠川文子 「孔子廟の制度と祭儀(積奠)」 『日本宗教事典(縮小版)』 弘文堂一九九四年 第六部 儒教 五二八―五三三頁。
- (2) 須藤敏夫 『近世日本積奠の研究』 思文閣出版二〇〇一年。等。
- (3) 孔子廟など儒教建築に関する研究は比較的多くなされてきた。  
・ 田邊泰 『関東地方に於ける古建築の研究』 第四編 儒教建築の研究。  
・ 飯田須賀斯 『江戸時代の孔子廟建築』 徳川公継宗七十年祝賀記念会、福島甲子三編

- 『近世日本の儒学』 岩波書店 一九三九年 九四七—一〇一三頁。  
 ・城戸久『藩学建築』 養徳社 一九四五年等。  
 儒教絵画については以下の研究があげられる。  
 ・杉原たく哉「狩野山雪筆歴聖大儒像について」『美術史研究 第三〇冊』 早稲田大学美術史学会 一九九二年二月 八三—一〇四頁。  
 ・杉原たく哉「聖賢図の系譜―背を向けた肖像をめぐって―」『美術史研究 第三六冊』 早稲田大学美術史学会 一九九八年二月 一一—二〇頁等。  
 ・鈴木三八男編『日本の孔子廟と孔子像』 財団法人斯文会 一九七四年。  
 ・翠川文子「釈奠(二)―孔子像―」『川村短期大学研究紀要 第一号』 一九九一年三月 二六—二〇九頁等。  
 釈奠で使用された祭器については、一九九一年、東京国立博物館において開催された、湯島聖堂伝来の釈奠器の特別陳列が注目される。  
 ・東京国立博物館編『特別陳列 湯島聖堂伝来 釈奠器』 東京国立博物館 一九九一年。  
 さらに、江戸期の儒教文化に関連した絵画・彫刻・工芸・書跡を網羅的に紹介した展覧会が近年開催されている。  
 ・『江戸は日本人を創った 湯島聖堂三〇〇年記念展 湯島聖堂と江戸時代』 財団法人斯文会 一九九〇年八月。  
 ・『足利学校―日本最古の学校 学びの心とその流れ―』 史跡足利学校事務所、足利市立美術館 二〇〇四年九月等。  
 (4) 孔子祭は毎年四月第四日曜日行われ、今に至っている。現在は財団法人斯文会による。なお、財団法人斯文会は、大正七(一九一八)年、斯文学会、孔子祭典会などが統合改組して創設されたもので、現在本部は湯島聖堂内にある。  
 (5) 例えば、大正九年に塚本靖氏が日本美術協会常会において講演した「孔子の像に就て」などがある。なお、この講演内容は記録化されていて読むことができる。  
 塚本靖「孔子の像に就て」『日本美術協会報告 第七輯』 日本美術協会 一九二〇年八月 一一—一〇頁。  
 (6) 『聖堂略志』では「孔子四子の諸像は其の彫工明らかならず」と記されている。  
 三宅米吉編『聖堂略志』孔子祭典会 一九〇八年 三頁五行。  
 (7) 山本泰一「尾張徳川家初代義直の儒学尊崇とその遺品について」『金鯉叢書 第二十三輯―史学美術史論文集―』 思文閣出版 一九九六年 一三七—一六三頁。  
 三山進「近世七条仏所の幕府御用をめぐって―新出の資料を中心に―」『鎌倉 第八十号』 鎌倉文化研究会 一九九六年一月 一—四四頁。  
 (8) 『源敬様御代御記録』及び『事蹟録』の「寛永九年七月二十四日の条」に以下の記述が見られるという。

- 「一聖像五林被仰付、此日出来」(『源敬様御代御記録』)  
 「(江戸)  
 聖人之像五林被仰付出来、右作料金三拾貳両貳歩、仏師左兵衛二相渡ス(御納戸帳)」、  
 (『事蹟録』)  
 前掲論文注7 山本泰一「尾張徳川家初代義直の儒学尊崇とその遺品について」  
 一五三頁下段四—八行。  
 (9) 前掲論文注7 三山進「近世七条仏所の幕府御用をめぐって―新出の資料を中心に―」  
 八頁下段三—八行。  
 (10) 該当箇所は以下の通りである。  
 「一寛永九年上野弘文院  
 五聖人御木像奉為彫刻、極粉色玉眼入、  
 孔子御長式尺老寸中尊  
 脇立 子思 顔子 曾子 孟子 四林御長式尺  
 右者前尾州大守大納言様被為仰付候、  
 調進大佛師廿三世左京法眼康音作」  
 三山氏は、この記録(なお三山氏は本文中便宜的に『御用覚書』と称している)が後世編集されたものであること、また林家の学寮が寛文三年に弘文院の号を与えられたことから、「上野弘文院」とは忍岡の先聖殿のことであり、記録が書かれた当時、この名称のほうが広く普及していたためではないかと述べている。  
 前掲論文注7 三山進「近世七条仏所の幕府御用をめぐって―新出の資料を中心に―」  
 三〇頁下段一—三頁上段。  
 なお、「弘文院」という名称は、寛文三年(一六六三)、林春斎(羅山の第三子)が幕府より授けられた号(「弘文院博士」)からきている。春斎はこの号にちなみ、書院を「弘文館」と名づけたという(『昌平志 卷第一 事蹟誌』)。  
 (11) 『昌平志 卷第一 廟図誌』には以下のような記述がある。  
 「越(寛永)九年壬申冬、尾張源敬公諱義直 捐數百金、即其宅地創造廟宇、今孤王祠、即其址、奉安宣聖及顔曾思孟諸像、且置俎豆、令信勝以時致祭、又書殿額、先聖殿、又称大成殿、命宮匠平内大隈、鐫以揭焉、」  
 黒川真道編『日本教育文庫―学校編―』日本図書センター 一九七七年 三〇頁九—一一行。  
 また『羅山林先生行状』には、「(寛永九年壬申)今冬尾陽大納言義直卿、構一堂宇上野別業、奉安聖像暨顔曾思孟像、且親書先聖殿三大字以揭之、且納祭器什件」とある。  
 『続々群書類従 第三 史伝部』国書刊行会 一九七〇年 四〇五頁上段一八—二〇行。  
 (12) 山本氏は、前掲論文の中で三山氏の論文に触れ、同時期に二組の聖像が注文された可能性は低いとして、仏師左兵衛と康音は同一人物ではないかと述べている。

前掲論文注7 山本泰一「尾張徳川家初代義直の儒学尊崇とその遺品について」  
一五四頁上段。

(13)「孔廟の設、原創於尾張公、而累朝因以加崇隆然、義不本於朝典、殆有闕於盛心、且地逼寺刹、縮流接蹤、夫蕪猶不同器、矧儒佛共乎、將審挾爽塏鼎新廟設」  
前掲書注11『日本教育文庫—学校編—』六〇頁一五行—六一頁二行（『昌平志 卷第二 事实誌』）。

(14)『昌平志 卷第二 事实誌』に、遷座の様子が記されている。

「超（元禄四年）二月七日奉遷神位、右京亮松平輝貞奉遷聖像繪給護焉、先赴忍岡俟神龕既発始到昌平、監察官一人、柴田某、率其属前導奉車、隊頭一人、蜂屋長員、先驅長一人、吉田某、并率其属排列送護、神龕凡五、每龕銀役服白丁烏帽赤脚八人、凡六十人、学生二人、服熨目半袴、夾從、監察官一人、牧野某、先驅長一人、并押後、又先驅長四人、佐野某、拓植某、小笠原某、岡野某、各令隊士守坊門、凡由忍岡至昌平、神龕所徑皆閉市鄙過人行、而街吏邏卒巡非常、銃手隊長一人、神谷某、率其属立仗於仰高門、弓手隊長一人、中根某、率其属立仗於棚門、而先驅長一人、并服熨目半袴、巡廟垣、樂工服符衣、位於西廊、俟神龕入入德門而奏樂、初神龕發忍岡也、真牌、大学頭林信篤先由間道徑赴昌平、盛服、服大紋鳥帽、晚俟於入德門石階下、執政加賀守大久保忠朝、但馬守秋元喬知、助工役飛騨守蜂須賀隆重、監察官徳永某、各盛服、忠朝服直垂烏帽、喬知服直垂大紋烏帽、徳永服布衣、排列於杏壇門、望神龕而各伏、已而正神座設十哲位、獻官、即林信篤、帥學生薦奠告遷、当此之時天下翕然知崇聖、喁然仰文治、大小諸侯皆承盛意、各製礼器購經書、以贊成其舉、設十哲主置仰高門、監察官監察儀、銃隊長衛諸門、并防此、」  
前掲書注11『日本教育文庫—学校編—』六一頁一四行—六二頁一〇行。

(15) 注10を参照。

(16) 前掲書注11『日本教育文庫—学校編—』三六頁八行『昌平志 卷第一 廟図誌』。

(17) 具体的には以下のようなものである。

- ・日（日輪の中に三本脚の神鳥）—万物を生成する陽徳の象徴。
- ・月（月に仙薬を掲ぐ兎）—万物を養成する陰徳の象徴。
- ・星辰（三つの星を線で結んだもの。北斗七星・五星のこともある）—四季の象徴。
- ・山（山と雨や雲を描く）—穩健重厚な天子の象徴。雲や雨は天子の恩恵を人々に施すことを表す。
- ・黼（柄のない斧を描く）—判断・決断力の象徴。
- ・黻（二弓が一對背中合せになったもの）—私心のないこと、分別力の象徴。
- ・華虫（五色の雉鳥を描く）—天子の御体を表し、道理と礼儀の象徴。
- ・龍（一對の五爪の龍を描く）—応変して天下に布教することを象徴。
- ・宗彝（一對の祭器にそれぞれ虎と猿を描く）—勇氣と知恵を表し、天子が神武で世を治めることを象徴。

・藻（水草を描く）—清浄さを表し、天子の潔さの象徴。

・粉米（田中に斑点を描く）—滋養を表し、天子が物事の頼りであることを象徴。  
・火（燃えさかる火焰を描く）—天子の徳の象徴。  
なお、この文様は教を減じること、臣下の礼服にも用いられ、九章は日・月・星辰を除いたもので公の礼服にあたるという。

参考 谷川健一編『日本庶民生活史料集成 第二十八卷 和漢三才図会（一）』三二書房一九八〇年 四三八頁（和漢三才図会卷第二十八 衣服類 袞衣）。

視覚デザイン研究所編『日本・中国の文様事典』視覚デザイン研究所編二〇〇一年 三〇一頁。

(18) 例えは足利学校には、新海竹太郎による模像が伝来している。この像は明治四三年（一九一〇）に制作され、像高は二一・五センチ、銅による鑄造である。

『足利学校—日本最古の学校 学びの心とその流れ—展図録』史跡足利学校事務所、足利市立美術館二〇〇四年。

また、『絵画叢誌 第二四四号』に掲載された「孔夫子の模造」と題する一文によると、山中泰山が湯島聖堂の孔子像の模像三〇〇〇体の鑄造に着手し、各大臣に贈ったという。

山中泰山は、おそらくは明治中期に活動した金工師で、日本金工協会にも参加したようであるが、詳しいことは分からない。また、彼の制作した模像についても、現在ところ

現物・記録等を確認することはできなかった。  
『記事孔夫子の模造』『絵画叢誌 第二四四号』一九〇七年八月 一三頁中段。

なお、こうした模像は、現在も各地に現存しているようである。このことについては、翠川文字氏の御教授による。

(19) 前掲論文注5 一〇頁上段七—八行。

(20) この古写真には以下の文献に収録されている。  
東京国立博物館編『東京国立博物館所蔵 幕末明治期写真資料目録—図版篇—』  
東京国立博物館二〇〇〇年。図版番号三〇八一—三〇八二。

(21) 旧湯島聖堂大成殿内部を撮影した写真としては他に、斯文会より発行された絵葉書がある。これは昭和一〇年（一九三五）に限定部数発行した『聖堂略志』中にも

扉絵として掲載されている。大聖殿の祭壇の様子を写したもので、大まかながら孔子像・四配像の像容を確認することができる。また孔子像ならびに四配の像は安置される位置が決まっており、この写真を参考に東博所蔵の古写真を見ると、現存の写真は、四配像（思子・曾子・孟子か）のものであると考えられる。

(22) 『昌平志 卷第一 廟図誌』には以下のように記述されている。  
「正殿、即大成殿、五間五尺南向、入深三丈七尺五寸、高四丈三尺三寸、（中略）殿中於北壁而

構室、高五尺八寸、深六尺五寸、内階七級、前設扶欄、而施翠簾錦帳、此為神座南向、神櫓五位、而東西向、設香主、（中略）兩廡各三間、深一丈九尺五寸、亦俱南向、北壁各架一層棚高二尺五寸、

与正殿合、共为一構、若張翼然」

前掲書注11『日本教育文庫—学校編—』三四頁三一六行。

(23)『昌平志 卷第一 廟図誌』には以下のように記述されている。

「正位南向

大成至聖文宣王像殿粧繪寶篋九章、

配享四座

東配二座南向 袁國復聖公顔子 沂國述聖公孔子思子

西配二座南向 鄭國宗聖公曾子 鄒國亞聖公孟子俱像殿粧繪

以上五楹、漆楹、朱裏、釘致、烏金、綴花、

東哲五位西向 費公閔子 薛公冉子 黎公端木子 衛公仲子 魏公卜子

西哲五位東向 耶公冉子 齊公宰子 徐公冉子 吳公言子 陳公顛孫子

以上共二楹、每五位、共一楹、○按、元禄癸未災、禮保焚亡、宝永甲申重製」

前掲書注11『日本教育文庫—学校編—』三六頁七一—五行。

(24)前掲書注11『日本教育文庫—学校編—』三七頁(『昌平志 卷第一 廟図誌』)。

(25)前掲書注11『日本教育文庫—学校編—』三七—三八頁(『昌平志 卷第一 廟図誌』)。

(26)『聖堂略志』によると、狩野常信筆の扁額について、撤座後所在不明であるとしている。一方、十哲の木主の方は、長らく蔵の中に納められていた後、東京高等師範学校に伝来したという。

前掲書注6 四三頁。

(27)前掲書注1及び前掲論文注3 翠川文子「釈奠(二)——孔子像——」。

(28)翠川氏は近世日本における孔子廟・祭儀の特徴として、①孔子廟を別棟で建てる

ことが少なく、多く校内の一隅に孔子像を安置したこと、②少ない孔子廟も中国制に倣

ったのは寛政の官学だけで、あとは文献などに準拠しつつも独自の手法で造営したこと、

③明代に定められた像にかわって木主を祀る制がほとんど普及しなかったこと、④明代

にあった孔子の親族を祀る啓聖祠の制を取り入れなかったこと、⑤配祀の数が全般的に

少ないこと、⑥中古にはなかった為政者(將軍・藩主)の釈奠参列があることなどを

あげている。

前掲書注1 五三二頁下段二—二二行。

(29)前掲論文注3 杉原たく哉「狩野山雪筆歴聖大儒像について」 III 粉本と関連作

品 九七一—一〇二頁。

(30)『昌平志 卷第二 事实誌』によると、この画幅は、尾張藩主義直公が、諸像・祭

器とともに寄贈したことになる(前掲書注11 三三頁)。だが、『羅山林先生

行状』(前掲書注11『続々群書類従 第三史伝部』四〇五頁)や『聖堂略志』(前

掲書注6 三頁)では、羅山が自ら依頼して描かせたとされている。また杉原氏による

と、羅山が《歴聖大儒像》の制作に際し、堀杏庵に画家の選択を相談したり、堀杏庵も山雪に羅山の指示を伝えたりしていたという(前掲論文注3 杉原たく哉「狩野山雪筆歴聖大儒像について」 八七頁)。このことから、《歴聖大儒像》の制作に羅山が深く関わっていることが示唆される。

(31)この諸像については、山本泰一氏によって論考が行われている。

前掲論文注7 山本泰一「尾張徳川家初代義直の儒学尊崇とその遺品について」

この諸像は、青銅に鍍金が施されたもので、山本氏によれば、名古屋城内の孔子廟に安置され、寛永六年(一六二九)林羅山が拜謁したものであるとしている。

(32)中国における像の変遷については、翠川氏の論文を参照した。前掲論文注3 翠川文子「釈奠(二)——孔子像——」。

(33)前掲論文注5 八頁。

(34)彩色木像。手に後補の笏を持つ。制作年代・制作者は不明。正明館は、寛政六(一七九四)年に創建。二月八日に釈奠を行い、孔子とともに顔子・曾子・子思・孟子・朱子を配祀した。幕府の聖堂の式を簡略化して行ったという(翠川氏の調査による)。

(35)木像。宝暦三(一七五三)年頃。大仏師法橋細沼定運作。もと佐倉藩江戸藩邸にあった。なお佐倉藩では、宝暦三年、江戸上屋敷に聖堂を建立し、昌平饗に倣って式次第を選定、釈奠を行ったのが、最初とされる。その後天保七(一八三六)年に藩校成徳院が建てられ、釈奠が執り行われた(翠川氏の調査による)。また、鈴木三八男編『日本の孔子廟と孔子像』(前掲書注3)も参照した。

(36)徳川美術館には、二体の孔子像が伝わっている。ともに尾張藩校内の明倫館内にあったとされるもので、制作年代・制作者は明らかでない。両者とも木箱に納められており、「孔子像」と墨書されている。だが、挿図のものは手を袖から出し、前面で重ねているが、一方は両手を袖中に納めており、また髭もあご一房だけで、他の孔子像とは趣を異にしている。こちらは、あるいは四配像の一つとも考えられる。

(37)絹本彩色。七一・〇×四一・三センチ。斯文会の水義徳氏によると、制作年代・制作者・来歴等は不明。画面右に「辺詣敬摸」との書き込みあり。旧湯島聖堂の孔子像を写したのもとも考えられる。

(38)背面の墨書など、足利学校の孔子像については、特に次の論文を参照した。

大澤慶子「足利学校孔子坐像考」『史跡足利学校 研究紀要 学校 第二号』二〇〇—二〇二頁 三三—一六三頁。

(39)例えば、日光山輪王寺大猷院本殿奥に安置されている、三代將軍徳川家光の坐像は、七条仏師第二四代康知が制作したものである。

参照「本朝大仏師正統系図 并未流」『美術研究 第一号』美術研究所 一九三二年一月。三三—四三頁。

(40)前掲論文注3 8 二四六—二五〇頁。

湯島聖堂大成殿内の画像・彫像に関わる略年譜

年号(西暦)	湯島聖堂大成殿内の画像・彫像関係	聖堂関係・周辺
寛永七年(一六三〇)		林羅山、三代將軍徳川家光より、上野・忍岡に五三三坪の土地と金二〇〇両を拝領、私塾及び書庫を建設する。
寛永九年(一六三二)	尾張初代藩主徳川義直、幕臣林羅山のために、七条仏師(第三二代康音)に命じ、孔子及び四配(顔子・曾子・孟子・子思)像を像造。 林羅山、狩野山雪に依頼し、伏羲・神農・黄帝・帝堯・帝舜・大禹・成湯・文王・武王・周公・孔子・顔子・曾子・子思・孟子・周子・張子・程伯子・程叔子・邵子・朱子、合計二人の聖人・儒者の画像(歴世大儒像)を描かせる。	林羅山、尾張藩主徳川義直の援助を受け、忍岡の私邸内に孔子廟(先聖殿)を建立。廟内に安置する孔子及び四配像、祭器、義直直筆の「先聖殿」扁額を寄進される。
寛永一〇年(一六三三)		林羅山、先聖殿で最初の積奠を行う。
万治三年(一六六〇)		幕府により、先聖殿・学寮の再建・大改築が開始され、翌年、正殿・杏壇門・入徳門などが建立される。
元禄元年(一六八八)	狩野益信により、賢儒画像扁額一六枚が制作され、先聖殿の東西兩廡に掲げられる。	十一月、第五代將軍徳川綱吉、先聖殿に参詣。以後、十一月二日が廟参の日となり幕府の公式行事となる。
元禄三年(一六九〇)	一二月、徳川綱吉により、直筆の「大成殿」扁額が寄進される。	七月、幕府により、新聖堂の建立が決議され、昌平坂(湯島)での建設が開始される。
元禄四年(一六九二)	二月七日、孔子及び四配像遷座。 (賢儒画像扁額も移され、大成殿兩廡に掲げられる。)	正月、湯島聖堂大成殿落成。 二月二日、湯島聖堂大成殿にて最初の積奠。
元禄十一年(一六九八)		湯島聖堂内に神農を祀る祠堂を建立。 九月、大火により、忍岡の先聖殿が焼失する。

元禄一六年（二七〇三）	当時の聖堂附火消役人、前田利直により、孔子及び四配像・十哲の木主は救い出され、浅草駒形に移される。一二月一日、焼け残った書庫に一時安置された後、仮殿が建てられ、遷座。 賢儒画像扁額は焼失。	一月二九日、地震による大火事が発生、大成殿・学舎などが焼失する。
宝永元年（二七〇四）	一月二五日、孔子及び四配像遷座。 狩野常信により、賢儒画像扁額が制作される。	一月、大成殿再建。
安永元年（二七七二）	当時の聖堂附火消役人佐竹義波により、諸像・諸額は焼失を免れる。祭器類はすべて焼失。	二月二九日、大火により大成殿類焼。
安永三年（二七七四）		大成殿再建。規模は往時のものに比べて縮小。
天明六年（二七八六）	当時の聖堂附火消役人酒井忠交の家臣により、諸像・諸額は焼失を免れる。焼け残った仰高門内西舎に安置。	一月二三日、湯島より出火、大成殿・学舎などが類焼。
天明七年（二七八七）		大成殿再建。規模は安永年間のものよりさらに縮小。
寛政二年（二七九〇）		湯島聖堂で、朱子学以外の講義が禁せられる（寛政異学の禁）。
寛政九年（二七九七）		幕府、湯島聖堂を官学とし、学舎の敷地を拡張、昌平坂学問所（昌平黌）を開設。
寛政一一年（二八〇〇）	大成殿北壁の中央に一室を構え神座とし、孔子像の神龜を安置、帳簾をかけて遮蔽した。平時は四配の神龜も神座内の両側に相對して置いたが、祭祀の時は、室外の東西に分置した。	寛政の改革に伴い、学制も改変、朱子学が官学となる。 大成殿が規模を拡大して再建される。朱舜水が徳川光圀のため制作した孔子廟の模型がモデルとなった。
寛政一二年（二八〇二）	十哲の木主並びに賢儒画像扁額が撤廃される。	大成殿再建後、はじめての積奠。
弘化三年（二八四六）		一月二五日、大火により、学舎などが焼失。大成殿は火災を免れる。

年号(西暦)	湯島聖堂大成殿内の画像・彫像関係	聖堂関係・周辺
明治元年(一八六八)	一月三日、王政復古の大号令(明治維新)。 二月一〇日、聖堂が新政府により接収。 八月一四日、昌平坂学問所、昌平学校へ改変。	
明治二年(一八六九)		八月一五日、政府、大学校を設立。昌平学校も大学校と称す。
明治二年(一八七〇)	大学南校(開成学校)に物産局仮役所が設置、湯島聖堂大成殿は鑑賞場となる。	一月一八日、大学校を大学(本校)と改称。 八月八日、大学本校閉鎖。
明治四年(一八七二)	九月一二日、文部省に博物館が置かれ、大成殿を陳列場とし、博物館と称される。	九月二日、大学廃止。文部省が創設。
明治五年(一八七三)	四月一七日、湯島聖堂で国内初の博覧会開催。	
明治六年(一八七三)	孔子四配像及び諸額・祭器類、博物館の移転に伴い、内山下町の陳列館に移される。	博物館・博物館・書籍館が博覧会事務局に統一され、内山下町に移転。書籍類は大成殿内に置かれた。
明治七年(一八七四)		大成殿内に保管されていた書籍を浅草蔵前にあった米倉に移す(浅草文庫)。
明治八年(一八七五)		三月三〇日、博覧会事務局、内務省の所轄となり、博物館と改称。
明治九年(一八七六)	孔子四配の神龕、内山下町の内務省博物館より、湯島聖堂大成殿内に戻される。	
明治一三年(一八八〇)		斯文学会発足。
明治四〇年(一九〇七)		東京高等師範学校職員有志の孔子祭典会が発足、湯島聖堂で維新後最初の積奠を行う。



大正七年（一九一八）		
大正一二年（一九二三）	孔子及び四配像が焼失する。	斯文学会、孔子祭典会などが統合し、財団法人斯文学会発足。
昭和一〇年（一九三五）	御物の孔子像が下賜される。	九月一日、関東大震災により、湯島聖堂が全焼。 湯島聖堂再建される。

参考文献

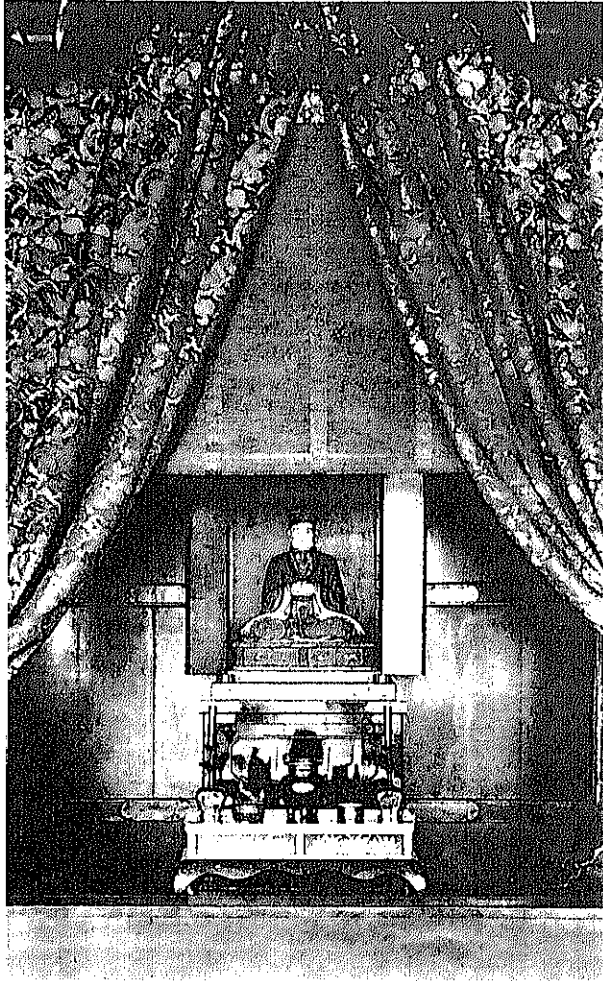
- ・黒川真道編『日本教育文庫―学校編―』日本図書センター 一九七七年
- ・『昌平志 卷第一 廟園誌』及び『昌平志 卷第一 事実誌』
- ・三宅米吉編『聖堂略志』孔子祭典会 一九〇八年
- ・財団法人斯文学会『写真と図版で見る 史跡湯島聖堂』財団法人斯文学会 二〇〇三年
- ・鈴木三八男編『日本の孔子廟と孔子像』財団法人斯文学会 一九七四年
- ・東京国立博物館編『東京国立博物館百年史』第一法規 一九七三年
- 等。

挿図1 新海竹太郎作 《孔子坐像》 明治四三年（一九一〇）  
史跡 足利学校 所蔵



挿図2 《孔子坐像》 天文四年（一五三五）  
栃木県指定文化財  
史跡 足利学校 所蔵





挿図3 聖徳創建三百年記念絵はがき 昭和六年（一九三二）

財団法人斯文会 発行

左 《先聖殿安置孔子尊像》

下 《先聖殿安置顔曾字四子像》

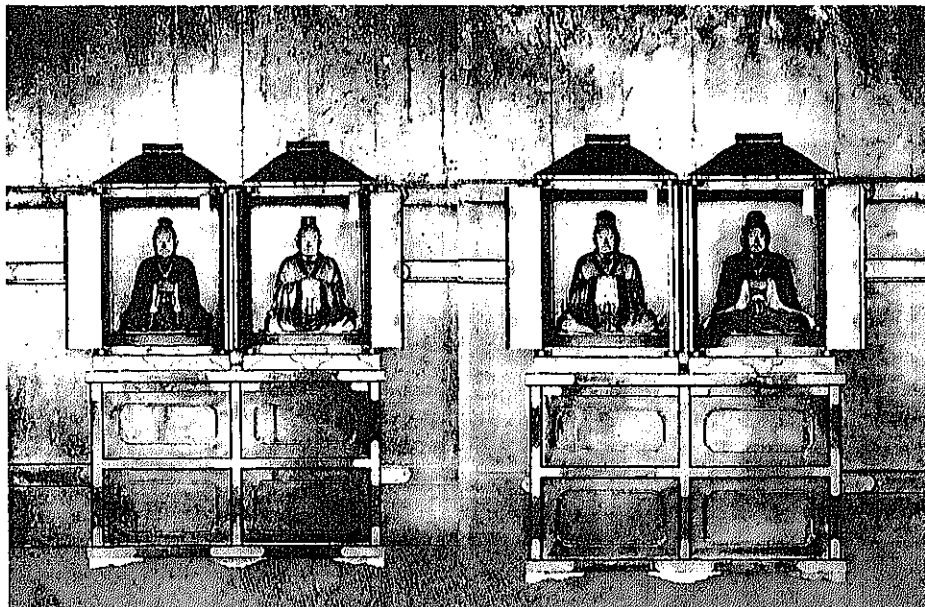


插图4 《正位配享從祀諸賢方位次序圖》『昌平志 卷第一 廟圖誌』所收  
 (文部省編『日本教育史料七』 臨川書店 一九七〇年 より)

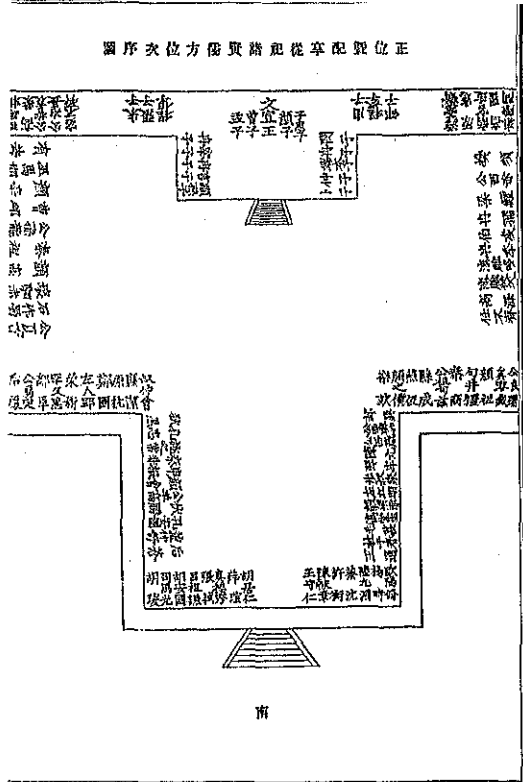


插图5 《神座圖》『昌平志 卷第一 廟圖誌』所收  
 (文部省編『日本教育史料七』 臨川書店 一九七〇年 より)

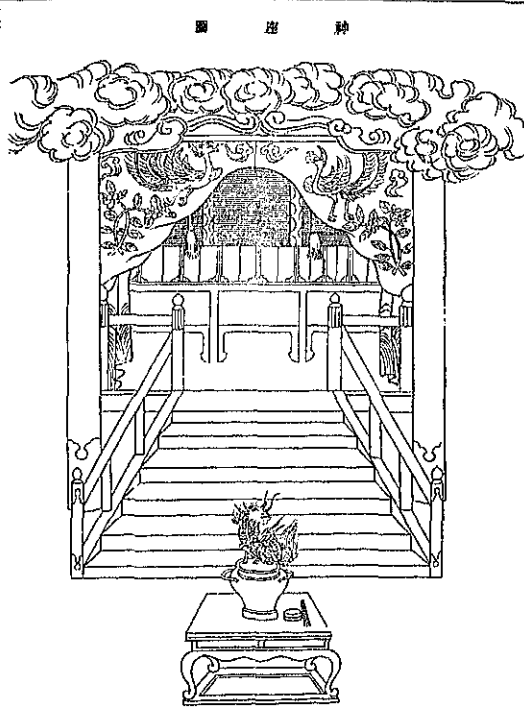


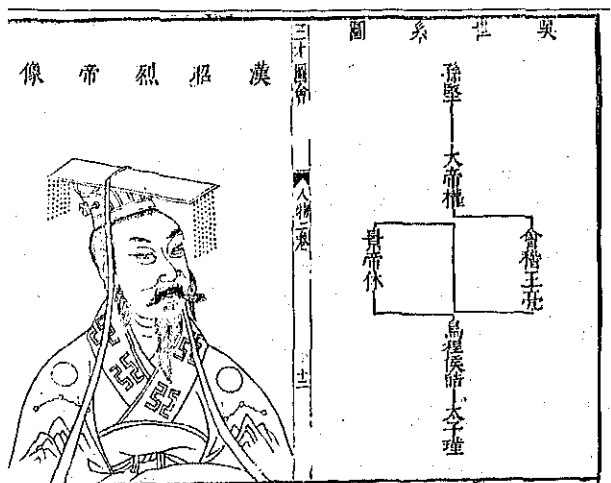
插图6 狩野山雪筆 《聖天彌修》(孔子) 寛永九年(一六三二) 東京国立博物館蔵  
 (上居次義『日本美術絵画全集 第二卷 狩野山楽/山雪』 集英社 一九八一年 より)



插图7 《先聖像》『三才圖會 人物四卷』所收  
 (王圻『三才圖會 二』 台北 成文出版社 一九七〇年 より)



插图8 《漢昭烈帝像》『三才圖會 人物一卷』所收  
 (王圻『三才圖會 二』 台北 成文出版社 一九七〇年 より)



挿図9 《文宣王像》 徳川美術館蔵  
右 正面  
左 背面



挿図10 《禹王像》 徳川美術館蔵  
右 正面  
左 背面

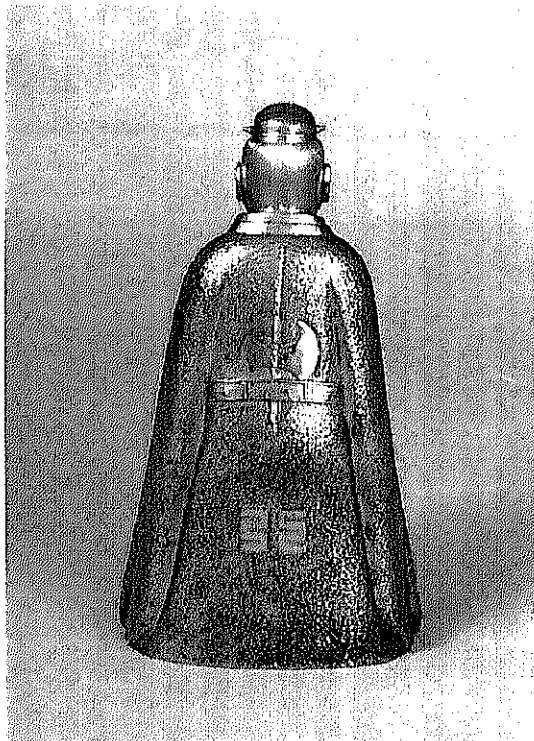
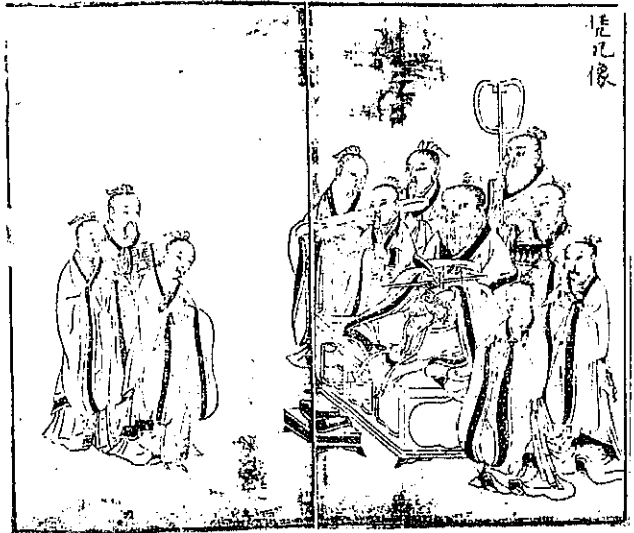




插图12 《丸龜藩正明館孔子像》  
丸龜市立資料館蔵  
(粟川文字氏撮影)

插图11 『關聖志』所収 《先凡像》  
(北京圖書館古籍出版編輯組  
『北京圖書館古籍珍本一三三』  
北京 書目文獻出版社 一九八七年  
より)



先凡像



插图14 《倉張藩明倫館孔子像》 徳川美術館蔵



插图13 《佐倉藩江戸藩邸孔子像》 佐倉高等学校蔵  
(外山信司氏撮影)



插图 15 孔子像  
湯島詔書藏 粟川文字氏藏影

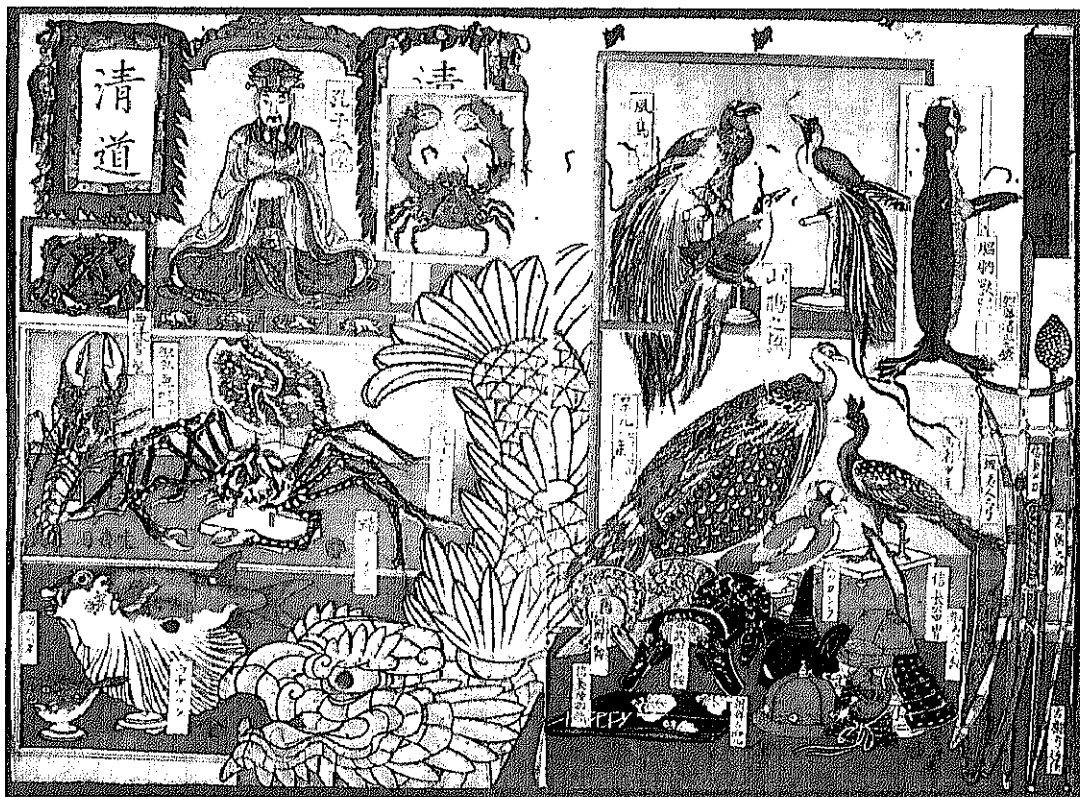


插图 16 河錦呢齋筆 谷井珍物集 明治五年 (二八七)  
東京都立中央図書館藏  
左上 部分拡大図